

句集
な
な
か
ま
ど

波
出
石
品
女

序

中田品女さんが嫁して波出石品女さんとなり幸福に満ちた生活をしていることは最もよろこばしい。

理解ふかいご主人がお前の句集を早く出さんかと後押しされるので、こんど作句をまとめて一冊にするのだとはに cand 話す品女さんである。

生まれつきの朗らかな性格を持つ彼女を知ったのは優しい看護婦であった。私のことばを受けとる態度が素直だった。彼女の名句の一つが証明する。

バス涼し歌が自然にとび出して

富士の麓へ吟旅があつた。バスに乗ってたいくつするじぶん^に涼しい歌声がきこえはじめた。歌手は品女さんだった。品女さんが強いられるままに歌っ

たのではなく、勝手にとび出したままに歌ったのである。楽器が鳴り出すというふうな自然はまことに邪気がない。その後彼女の美声に惚れて南国土佐をいくたびせがんだことだろう。

久留米に旅をした女仲間で酔芙蓉会を作った。当番にあたった彼女は私を招いた。

狭いのよ狭いのよとて雛の宿

アパートの一室ぐらしだから何も彼もが置かれてあり小さい雛を飾っている。女主人はしきりに同じことばをうるさく繰返すのでおかしかった。全くその気持がこの一句にただよっているのである。

手は夜なべ脳はあそびを考へし

品女さんは自由に自分の見聞を匂に仕上げる才能がある。型にとらわれることなく感動が型を創めて作る。だから新しくなる。

手は夜なべをし、頭は別のことにうごいているといふふうな理詰めを、巧みにそらしてくるなどわれわれを駭かせる。

包丁が難儀してゐる南瓜かな

最後に彼女の忠実な主婦ぶりを見てもらうために台所の光景をのぞいて、おそまつであるが序のことばとしたい。

一九八二年三月十八日

阿波野 青畝

昭和三十三年

まばたきてまばたきて月仰ぎけり
汗の手をにぎりて筆を持たせけり
酒蔵に押しつけてゐる西日かな
針箱をひきずりもして布団縫ふ
縫ひあげし布団に頬を埋めてみし

俯向きて瞼重たし布団縫ふ

大試験終れば見たき映画あり

フレームの空気異なる扉を押しぬ

髪容考えてゐる朝寝かな

道問へばセーターの子が寄つてくる

本降りとなりし牡丹地を叩く
高値薬ばかりを並べ冷蔵庫
鶯の笛とわかりて大笑ひ
汗拭いても拭いても針はきしみけり
裸の子やがて麻醉のかかりけり

書を曝す譜面が出れば歌ひけり

貸本屋奥まで西日届きけり

夏痩せの母にかかはりなく育ち

昭和三四年

大文字どのへんに出てくるのかしら
端居して夢と異なる人と在り
白靴の夕闇蹴つてもどりけり
手紙焼けるまで見守りし焚き火かな
彼の死に間に合はざりし足袋を履く

考へている指先よ糸編む
鼻先に林檎のにほひ文を書く
突然に鴨総立ちや何かある
朝涼し時間をかけて髪を梳く
伎芸天女に冬日欲し我に欲し

一致せる意見火鉢を叩きけり
マスクの眼うなづき合へる手術かな
頬寒し袂を二つ重ねても
風除けになつてやろうと彼起ちぬ
てぶくろのままなれどとんでもなき字

こころみな庶民の街や布団干す

この汗はショックのためと思ひけり

香水に関心を持ちはじめけり

籐椅子を奪はれたりし食後かな

もてあそびつつ唇のさくらんぼ

暑さとは反対色を着て居りし
彼の意にしたがひがたき端居かな
バス涼し歌が自然ととび出して
裁屑を持ち去つてゐる風涼し
暑に耐ふる力を得たり「虚子百句」

春
愁
の
一
人
の
時
間
多
す
ぎ
し

昭和三五年

後悔の敗北に似し足袋を脱ぐ

十代は単純に菊鑑賞し

意地でのむビールの彼を知りにけり

音楽が友達となり毛糸編む

左手を追ひくる針や布団縫う

すくひつつすくひつつ縫う布団かな

失恋の予感おそろし足袋を見る

髪洗ひつつ泣き伏してしまひけり

活発に働く指よ糸編む

白靴の彼の歩幅に合わせけり

滝仰ぐ暇時々閉ぢにけり

掃き落す火蛾一ぱいや下駄の上

暑に耐へてかなしみに耐へがたきかな

一日で仕上げたく縫う浴衣かな

柄合せすめば簡単浴衣縫う

針持ちて針に馴染まぬ夜なべかな

昭和
三六
年

すぐ浮いてくるヘアピンや秋の風
白靴に垂直に落つまなざしよ
這ふ糸の針にしたがひ布団縫ふ
かなしみを耐ふる奥歯や懐手
負ひきれぬみとりのわざや寒灯下

涙出る程に凝る肩糸編む
紙雛を褒めてやりつつ看護りけり
布団に手あてて病状問ひにけり
日の椿落ちて日かげにころびけり
花衣脱げば掃除が待つて居る

からつぽの布紋竹壁叩きをり
髪洗うふ間目つむり通しかな
紹介をいきなりされし汗を拭く
おくれ来て今からつぽの避暑の宿
瓜きざむ肩小きざみにふるへけり

陀羅尼助炎天干しにしてありぬ

気まぐれに照り気まぐれに秋の雨

どこまでが座敷なるかや松落葉

昭和三七年

おにぎりに人気集まり夏料理
まばたけばふくるる感じ月仰ぐ
畳拭くセーターの肩力あり
足組めば組みし高さの布団かな
注射液吸うてしまひし布団かな

悴みて洗濯ばさみこぼしけり
体温を伴い脱ぎし綿子かな
レスリング嫌ひつつ見て懐手
をだまきの花覗く膝かがめけり
献立に赤を添へたくトマト買ふ

宙に浮き風とたたかふ鉄線花
赤味噌の白味噌よりも黴び易し
まな板をとび出し勝ちよ瓜きざむ
サンダルの指うごきゐる女かな
髪洗ふ目ナ尻力を入れにけり

暑に負けてならぬ献立作りけり

ひつぱってひつぱって水着脱がせたる

昭和三八年

意識下に欲求不満寒かりし
ボーナスの記事食堂の壁を占む
又しても浮腰となり布団縫ふ
雪空の暗さの救ひがたきかな
春愁を忘れてゐたる習字かな

肩おさへ座らせられて花莖
ひももつれ合ひし箆笥の扇かな
炊飯器今音立てぬ豌豆むく
紐が切れ発止と落ちし簾かな
秋の草生き返りたる洗面器

昭和
三九
年

鹿多き飛火野に來し我等かな

萩枯れてことごとく枯れつくしけり

ストーブにバアのマッチを使いけり

花篝燃え夕暮れをさそひけり

俎にとろりと種やトマト切る

噴水の女神に向きて煙草吸ふ
海の風チューリップ園とみに揺れ
気を反らすことも看護や金魚玉
香水のこの瓶欲しくなりにけり
炎天にのみさらされて救護班

墨
雛
奈良の都に生まれけり

噴
水の大円柱となりけり

昭和四〇年

朝まだきはじまる 鋏松手入

貫一は菊のマントをひるがへし

闇汁のあとかたづけは気の毒な

ブナ林縫ふは戻りのスキーかな

歌うたふことは健康冬籠

冷やかに冷やかにメス動きけり
公魚のしろがねつらねつられけり
涅槃像早く夕の来たりけり
垂らす足闔に突込む端居かな
古筵突き破りあるもの芽かな

清潔にハツに切られしトマトかな

夏みかん卓に押しつけむきにけり

汐満ちて蟹とあそべずなりにけり

暑に耐へてをる病人の瞳かな

もぐらむと蟹逆立ちになりにけり

ボート番にらみ効かして居りにけり

須磨全体にぎはひにある泳ぎかな

器とは板一枚やわらび餅

汗の人胸の湿布をきらひけり

昭和四一年

灯おもてにまはりて萩に立ちにけり

架稲の山陰道は雨どころ

ななかまどには伝説のあることを

奈良の鹿らしく気品を持ちにけり

見るからに生臭坊主日向ぼこ

修道女たちに組まれし稲架と聞く
闇汁にさへも家風の見られけり
水餅の沈みゆくさま見えにけり
働かぬ左手ばかり悴みぬ
種痘の児泣きつつ我をにらみけり

まぶしさや白鳥をふと黒と見し

香水を持ちて宝石まだ持たず

おでん煮るなんべん蓋を開けたかしら

白涼し黒なほ涼し夏衣

焼酎は男梅酒は女かな

夏寒し一刀彫を見てをれば

夏期学校らしや何にもなき広さ

冷奴こんなによろこばれしとは

茄子漬のこれといふ色出せぬかな

この石段位は平気法師蟬

昭和四二年

草泊りほんとにそこに居りにけり
ぐいのみといふ言葉好き新走り

修行僧掃除地獄の草を刈る

蒟蒻玉といふより薯といふべきか
思ひきりうたつて年を忘れけり

僧院の火事よ思ひもよらざりし
かき餅の抔げられみな反りかへり
どろどろにとけたる味噌やぼたん鍋
棚の本ならば替へては冬ごもり
白魚売来てみてヘルン旧居かな

客も客僧も亦僧花喧嘩

砂日傘ぱつと開きし力かな

沈金の盃とりて新酒くむ

塗香している間に汗のひきにけり

高校生大噴水を占領す

行灯をもち去られば萩淋し
今晚は湖泊り鴨料理

昭和四三年

志生きて居りけり露の墓
広辞苑その貫禄や秋灯下
息白く鎌倉彫を求めけり
十人が十人湯ざめしたりしと
力ある成人の日の言葉かな

セーターの軽快心軽快に

旅空に雑炊欲しくなりにけり

椰子属が大温室を占めにけり

お別れのための草笛吹きにけり

孕み鹿どこかに気品ありにけり

スピーチを覚悟し苺つぶしつつ
神戸つ子らしきセンスやサングラス
教会に咲きしさうびの気品かな
汗かかぬことも舞妓の修行かな
この患者金魚マニアになりけり

禅
僧
に
育
て
ら
れ
を
る
瓢
か
な

昭和四四年

秋立ちてうなじは感じ易きかな
幼な顔なる学僧や水を打つ
落語家を志したる帰省かな
気づかれぬ女のファイト懐手
木曾にある思ひとなりし火燧かな

日向ぼこ眼鏡が熱くなり
にけり
剃毛といふ冷たさや手術前

あたたかくなりしノートや日向ぼこ
マスカット交際求められ
るたり
一鍬に筍強くふるへたり

若竹の若さと我の若さかな
風鈴のよく鳴る芦屋住ひかな
ステンレス流しに映る顔涼し
今日客のあらばよろこぶ萩ならむ
草を刈る僧の働き盛りかな

昭和四五年

息白く息白く練る陶土かな
一言もかたらずに息白きかな
窯元を訪ひてあそべば天高し
噴煙を仰ぎ飽きしよ日向ぼこ
吸ひこみし息の冷めたき座禅かな

小手のうち大末枯の那須野かな
闇汗のたねも女に一任す

カーテンの笑つてゐたる朝寝かな
狭いのよ狭いのよとて雛の宿
痛むときかならず汗をかきて病む

禅僧を働き蜂にたとへたり

学僧と噂の女との端居

すみれ草祇王と祇女に摘みにけり

町出水覚悟を決めて歩きけり

泳ぎ子の走り抜けたる忌垣かな

化野の夕立欲しき仏たち

昭和四六年

父の墓大秋晴のまん中に

父逝きてばかりと寒き座敷かな

草の実のつきてはなれぬ喪服かな

こんなにも冷たき土よ父眠る

真ツ白き障子見てわが喪中かな

画も文字も逆さまに訃の屏風かな

泣くために布団にはひるやうなもの

法要の下働きや炭をつぐ

仏の間なりし朝寝が恥かしく

父といふ大黒柱夏涼し

障子開きしが起きよとは云はざりし
帰るさの道のくらきや手灯会
あだし野の仏に秋の深きかな
病人の氷片ばかり欲しがりぬ
セーターをやうやく脱げば乱れ髪

救急車のみの追ひかくる吹雪かな
ぬれがちのまつ毛となりしマスクかな
顕微鏡あわててマスクはづしけり
てのひらに丁度乳房やふところ手
顔剃らせゐること忘れ春眠し

柏餅てのひらよりも巨大な葉
ターザンの真似して山を登りけり
家涼し避暑の気分と異ならず
紫蘇や埋めちぢこまりけり土用干
倒れんとして山門や芭蕉林

学舎面ヲしてゐる彼の端居かな

首反らし身じろぎもせぬ蚕かな

昭和四七年

消えさうな弱火なれどもおでん煮ゆ
足休み手は働ける火燧かな

風邪の神とばせとて唄うたひけり

整ふる息の永しや弓始

勢揃ひしたる袴や弓始

肝心のところで咳や講義聞く
ていねいに書くほどペンの涼しけれ
知つてゐる患者の嘘や夕端居
目の奥の痛みをおぼえ花疲
水着ありミセスの店にはひりけり

叩
か
れ
て
落
第
し
た
る
西
瓜
か
な

昭和四八年

煮こぼれしよだれの匂ふ柚味噌かな

ふところ手ふたたび岐路に立ちにけり

コート脱ぐところ見らるる見合かな

初明りしてきし真珠筏かな

元日の海女の実演気の毒な

もう印などつけられて初暦

ぬかみその匂ふてのひら毛糸編む

冬帽子彼女大陸育ちかな

眼ナ尻にすこし皺ありサングラス

じやがいもの北海道の土落す

白靴のよろこぶやうな若さ欲し

老鶯に搾乳の朝はじまりぬ

桃はむき易しとナイフ使はずに

おしやべりもしたく昼寝もしたき我

西瓜提げきてにこにこと玄関に

昭和四九年

ロケーションの女優を泊めし布団かな
せつなさが歌につたはり息白し
干してある蛹を猫のねらひけり
誇らしく種薯としてころびをり
種薯のがらんどうなる軽さかな

貧しさをかくさぬ僧の夏炉かな

岩鼻におうと一声鮎敵

村一の大藁屋根の避暑の宿

昭和五〇年

摘みとられさうにつき出て吾亦紅

この季寄せ芒の頁すぐ開きし

朝市の蛤の舌つつきけり

帆のごとく立てし障子を洗ひけり

籐椅子を奪はれたりし食後かな

活 爨 に 働 く 指 よ 毛 糸 編 む

病 人 の 地 獄 と 嘆 く 西 日 あり

雑 魚 寝 さ せ ら れ た る 枕 明 易 き

教 会 へ 甘 藷 畠 を 通 ひ け り

洗 ひ 髪 顔 を は な れ て 吹 か れ け り

縁側に草とんでくる野分かな
細き顔細き顔みな孕み鹿
大人びて歩く十三詣かな
失はぬ積極性やふところ手
落柿舎を守る障子の寒さかな

煮えてゐる露の苦さの匂ひけり

はねつるべとはなつかしきキャンプかな

鶏に追ひつかれたる蝗かな

帯にありながら使はぬ扇かな

昭和五年

清潔の舗道ハイビスカスに沿ひ
家涼し大王椰子にかこまれて
プロポーズ実感となる足袋をはく
にぎやかな苺を洗ひゐる声は
寝すごしてねぎをきざめる慌てぶり

軍手とは大きな指や草を取る

主婦たのし昼寝をしてもしなくても

昭和五年

瀬戸の日にそだてられたるみかんかな
道ちぬれて霧の深さの知られけり
物置に冬至を待てる南瓜かな
はらはざる眉の埃や藁砧
煮凝の目玉に箸を入れにけり

岩くだくごとくに牡蠣を割りにけり

蛇つかみたる人の手をきらひけり

きゆつきゆつとなかせて茄子洗ひけり

十人の客でも平気布団干す

昭和五三年

苔に寝てゐるどんぐりを拾ひけり
身を揺りて籐椅子に聞くシヨパンかな
炉に思ふ一期一会といふことを
お点前や炉を中心に中心に
炉塞いでありたる今日の点前かな

テーブルはスープを待ちぬ桜草
添竹に打たれし頬や豌豆摘む
畳の目数減る感じ足袋歩む
裏返す一粒づづや梅を干す
白髪の世話人多し原爆忌

一と握りほどに漬かりし貝割菜

昭和五四年

物価高とは云へ花火安かりし
手は夜なべ脳はあそびを考へし
ざぶざぶと箆動かすや菜を洗ふ
足袋を履く格好誰も見てをらぬ
雪沓の僧に従ふ檀家かな

針に糸通し忘れし初音かな

湯豆腐かとは気に入らぬらしきかな

歩を止めむ鶯鳴くかも知れぬ

句帳とは大学ノート虚子祀る

黒ぼこは種蒔を太らせにけり

セーターは最高われの働き着
鈴の鳴る匂ひ袋や単物
母健康大山西瓜育てけり
わが魂と思ふ硯を洗ひけり
鯉健康われも健康明易し

の
ち
ほ
ど
と
い
ふ
挨
拶
や
月
見
草

昭和五五年

引つ張られ踊る阿呆になり
にけり
秋風にさらはれさうなうぶ毛かな

長男はすなはち本家障子貼る

高値とははげみなりけり牡蠣を打つ

寒鯉の屯ろ変りし夕かな

蓮如忌や人はみな白骨となる

こんなとき俳句できさう落葉踏む

夫婦鴨かと思ひしにはなれけり

踏みこみし土間の広さや寒造り

指曲げる凍みるとはこういふ感じ

買ふ顔と買はぬ顔あり苗木市

端居して我の存在価値思ふ

メロンさえ喉頭を通らぬ喪服なか

冷蔵庫過信してゐるかも知れぬ

昭和五六年

我歩む方へ方へと鯉涼し
目が汗を辛いと感じたりしかな
肘鉄砲受けし乳房や髪洗ふ
献立の閃きたりし冷蔵庫
白さとは気品なりけり足袋を履く

松茸のお礼恐縮々々と

名案の出るのはいつもふところ手

威厳とは動かぬことや檻の鷺

から揚げのごとくちぢれし紅葉かな

この煙苦情が出さう落葉焚く

名物の山陰の芸類かむり
牛の前通り沢庵出しにけり
猿廻しなかなか芸を見せぬかな
広島に住みながら牡蠣きらひけり
人生は人生はとて爛熱し

画面いつぱい皇后さまと蚕かな
原宿にあこがるる娘や春休
苗札をとばしてをりし帚かな
猿回し猿にあやまらせてをりし
納得のゆくまで書かむ墨涼し

カーテンにすがりつき蟬生れけり

清潔が第一の我が冷蔵庫

空らつぽの箆筥となりし土用干

包丁が難儀してゐるかぼちやかな

叩き売りされれば買はぬ西瓜かな

ステージに歌ひし日あり虫を聴く

あとがき

先生に序文を頂戴しました夜、涙がにじみました。

昭和三十二年かつらぎ入門以来ずっと先生に見守られて来た、という思いがこみあげてまいりました。特に独身の長かった私は、人間性、ということをととても意識していた様に思います。そんな思いの私の助けとなったのが俳句だったと思います。俳句による豊かな人間関係は、かけがえのない財産と
思います。

口絵の写真は、二十年程前に先生から頂戴いたしました色紙で家宝でございます。

題字、片仮名と平仮名も先生から頂戴いたしました。

句集名『ななかまど』は、ふるさと大山に思いを寄せて名付けました。

上梓にあたりご助言下さいました森田峠様と中本本店印刷様のご好意に深く感謝申し上げます。

昭和五十七年四月十七日

波出石 品女

句集『ななかまど』（複製版）

平成五七年八月二五日 印刷

平成五七年八月三〇日 発行

著者 波出石品女
編集 かつらぎ発行所
複製編集 ゴスペル俳句